

キャラクターエデュケーションの概念的枠組みと 日本語版徳目作成の試みⁱ

青木 多寿子
(2007年12月3日受理)

Character Education in USA and the Trial to Integrate Japanese Virtues

Tazuko AOKI

Abstract. This study has two goals. One is to explain the conceptual framework of Character Education in USA which is not known well in Japan. And the other is to try to translate the Boyer's virtues (1995) to Japanese. The first goal is to explain the definitions of characteristic words in character education, for examples character, virtues and values. Additionally I explained the important ideas in teaching these goals and the pitfalls to avoid in character education. For the second goal, I try to not only translate from English to Japanese but also to integrate Japanese traditional virtues. I translated ideas Boyer's virtues, respect, responsibility, perseverance, honesty, compassion, self-discipline, giving and courage. I showed that to integrate Japanese virtues into the translation will better enable students to understand the concepts, rather than rely on simple translation. I discussed helping students "to know the good, love the good and do the good" with Japanese virtues contribute to their becoming good citizens as well as international people of character.

1. キャラクターエデュケーションの概念的枠組み

(1) はじめに

アメリカの教育がよくなったとの報告を目にするようになった(青木, 1999, 2001, 2002a,b; 加藤, 1999, 2004, 2006; 水野・望月, 2006)。アメリカの教育改革の成果が現れた要因は複数あるが, その一つがキャラクターエデュケーション(Character Education)だと言われている(加藤, 2004)。

キャラクターエデュケーションとは, 本来はキリスト教の影響を受けたもので, ①子どもたちを良い子にし, ②子どもたちが良くなることを助ける働きがあるものである。良い行動とはどのようなものか, 良い人になるとは具体的にどのようなことを指すのか, よい行動を実際にどのように実行すればよいのかを子ども達が理解するのを助け, その実行に関わらせ, 自分自身の生活を良い方に導くように援助してゆく教育だとしている(Licon, 1993)。この教育は昔からあるもので, 決して新しいものではない。しかし20世紀にな

ると, アメリカでは価値は学校で教えるものではないという風潮が生まれ, キャラクターエデュケーションは一時期衰退した。

ところが1990年代の中頃から, 民族や宗教を超えて, 多くの人が共有する倫理的, 文化的な徳目が必要だと考えられるようになり, これを地域とのパートナーシップで形成しようとする動きが生まれた。この宗教は民族を超えた徳を地域ぐるみで子ども達に身につけさせようという動きが新しいキャラクターエデュケーションである。Table 1には地域ぐるみで品性を育てるよう, 学区や州で採用されている徳目の例を示す。

1990年代中頃から生まれた新しいキャラクターエデュケーションについては, 資料1のボストン大学の「マニフェスト」(Ryan & Bohlin, 1999)を読むと概要が理解できる。新しいキャラクターエデュケーションでは, 子ども達の徳を育むことに教師が取り組むこと, その際, 学校だけでなく, 保護者やコミュニティを巻き込み, また, 人格教育の担当者だけでなく, すべての教科を通して,

Table 1 アメリカで採用されている徳目例

ブルーバレー学区*	ノースカロライナ州**	モンテクレークインバレー校***
尊敬 (respect)	勇気 (courage)	敬意を持って (respectful)
責任感 (responsibility)	良い選択 (good judgment)	親切に (friendly)
忍耐強さ (perseverance)	誠実 (honesty)	責任を持って (responsible)
奉仕 (giving)	親切 (kindness)	自信を持って (confident)
自己統制 (self-control)	忍耐強さ (perseverance)	節度を持って (temperate)
正直 (honesty)	尊敬 (respect)	公平に (fair)
共感 (compassion)	責任感 (responsibility)	広く関心を持って (informed)
勇気 (courage)	自己統制 (self-control)	誠意を持って (honesty)

* カンザス州の学区。義務教育全体で（幼稚園年長組から高校）で採用されているもの

** ノースカロライナ州全体で制定されているもの

*** ニュージャージー州の私立学校（幼稚園年中組から高校）で定められているもの

また、学校生活のあらゆる場面を通して、地域と学校と保護者と力を合わせて、高い品性を持つ未来の地域住民を育てようとする姿勢が見られる。

1990年代のブッシュ政権時代に始まったこのキャラクターエデュケーションについて、クリントン大統領は「すべてのアメリカの児童に、品格を教えることにチャレンジする」と強調した。これを実現するため、アメリカでは州によって、学区によって、身につけさせる徳目が決められているところがある。加えてFig.1に示すようなポスターを学校に張ったり、グッズを作ったりして、いつも意識を喚起して、全ての教科を通して、これらの徳目が身に付くように、学校生活のいろんな場面で、繰り返し品性の徳目が語られ、意識づけされている。日本では、この動きは人格教育、品性徳目教育、キャラクターエデュケーションとして紹介されている。

しかし日本ではキャラクターエデュケーションの方法や本質が理解されているとは言い難い。原因の一つは、キャラクターということばだけでなく、そこで用いられる数々のことばの難しさがあると著者は考える。そこで本稿は、キャラクターエデュケーションで使われる、キャラクター、徳、価値、ものの見方、などの言葉の解説、さらに、キャラクターエデュケーションで最も重要とされる「respect (尊敬)」、「responsibility (責任感)」などの言葉を解説し、概念的枠組みを示すことを第一の目的とする。

また、キャラクターエデュケーションが良いものとしても、日本が取り入れるには、ある種の

困難があると感じる。もちろんことばや文化的な背景の違いもあるだろう。しかし何と言っても日本人の考え方になじむものでなければ、日本人にとってよいキャラクターエデュケーションとにはならないと違いない。そこでこのアメリカのキャラクターエデュケーションの本質を理解し、日本人の徳についての考えを調べた上で、アメリカの徳目を日本に適したものに翻訳して日本語版の徳目の試案を考えてみることにする。

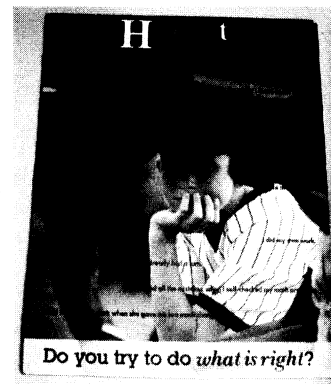


Fig.1 ポスターの例 (Honesty) ii

(2) キャラクターの語源とは

Character Educationは「人格教育」または「人格の教育」（水野, 2001; 水野・望月, 2006; 上寺, 2003）という言葉を使うもの、「品性徳目教育」という言葉を使うもの（青木, 1999, 2001, 2002a,b, 2002）、「キャラクターエデュケーション」とカタカナ表記で使うもの（加藤, 2004, 2006）など、様々に紹介されている。日本では一般に、キャラ

クターとは、例えば「アニメのキャラクター」などのように、良くも悪くも、登場人物の特徴を表す言葉として使われる。しかしキャラクターエデュケーションで使われるキャラクターという言葉の意味はこれとは少し異なっている。

このキャラクターの語源について、渡部（2004）はパーソナリティ（personality）と比較して次のように説明している。「パーソナリティとは、わき上がるような衝動を指す。これに対して、Characterは、習慣的に刻み込まれた性格、人格の部分という意味である。つまり、だんだん、人生を送っているうちに刻み込まれてつくりあげていったような感じのものをCharacterと言う。習慣とは1回ごとに刻まれる傾向がある。こうして刻み込まれた性格、人格がCharacterとなる」。つまり、キャラクターとは、人生を送っているうちに、繰り返し行うことで体得するような、一種の癖のようなもの、そして繰り返し習慣的に行うことで身に付いたパーソナリティを表していると考えられる。

渡部（2004）は習慣と癖は、考えてみると同じものかもしれないという。癖は無意識のうちに毎日繰り返される。その結果、毎日、その行為が刻み込まれ、強化される。こう考えると、よい習慣を身につければ、どんどんよいものが身に付いてゆくとと言える。逆に悪い習慣を身につければ、悪い習慣がどんどん強固になってゆく。さらに言うなら、習慣になっていない行為は実行するのが難しいけれど、習慣にしまえば、難なくできる、とも言える。

キャラクターに関し、リコーナ（2006）は、次の格言を挙げている。これを見ると、キャラクターは、思考や行動、習慣以上のものであり、時には運命に関わるようなものであることがわかる。

考えに気をつけて Watch your thoughts,
 考えはことばになるから they become words.
 ことばに気をつけて Watch your words,
 ことばは行動になるから they become actions.
 行動に気をつけて Watch your actions,
 行動は習慣になるから they become habits.
 習慣に気をつけて Watch your habits,
 習慣は品格になるから they become character.
 品格に気をつけて Watch your character,

品性は運命を創るから it becomes your destiny.

(3) 「よいキャラクター」とは何か

ではキャラクターが習慣によって身につく性格のようなものとしたとして、よいキャラクターとは何であろうか。Ryan（1999）は「よいキャラクターとは、何がよいのかを知っており、良さを志向し、良さを実践すること（knowing the good, loving the good, and doing the good）」と定義し、この3つは結びついたものとしている。つまりよいキャラクターとは、良い行為、よい活動の習慣以上のものであり、知識（knowing）、志向（loving）、実践（doing）の3つを兼ね備えて良い行動をとることを意味する。

そして、よいキャラクターに関わる「知識」には良いものと悪いものに対する意識、やるべき正しいことを選択できる知性を発達させることが含まれる。良さを「志向する」とは、悪を避けて良いことを志向し、隣人を慈しむこと道徳的、感情的資質が含まれている。さらによさを「実践する」にはいろんな状況、環境を十分考慮し、行動しようとする意志を持つことを意味している。これらのことから、プレッシャーの中で、緊急時などに、知識、志向、心、実行の3つを備えた行動をとる人がよいキャラクターの持ち主ということになるだろう。

このよいキャラクター、または良くないキャラクターを日本語で表現すると、個々人の持つ「品性」「品」の違いと言うことになるのではなかろうか。ここにCharacterが「品格」「品性」とも訳される理由がある。また他方で、前述のように人の人格には二つの側面、つまり1) 生まれながらに持っている側面、2) 生まれた後の人生で個人の習慣によって形成される側面、の両方があり、この両方で人間の「人格」が完成すると考えると、キャラクターエデュケーションは、よい習慣を培って「人格の完成」を目指す教育とも言える。ここにキャラクターエデュケーションが「人格教育」「人格の教育」と訳される所以がある。

これについて著者は次のように考えた。Fig.2に、人格を構成する要素を表した。人格は学習による知性、生まれつきの性質による個性、そして、生後の習慣による品性、という2側面で成り立っているのではなかろうか。このように考えると、

Characterは「個性」「知性」と同じく「性」のつくことば「品性」と訳すのがふさわしいのではなからうか。

他方、品性にはよい、悪いという方向性がある。品性の場合、悪い場合は「下品」とよび、良い場合を「上品」と呼ぶ。さらに、上品さ、よい品性を持っている人を「人格者」とよび、「気品がある」「品格がある」という言い方をする。個性には上下や良い悪い派余りないが、品性には良い悪い、上下がある。そして、キャラクターエデュケーションは良い品性を持つ人、上品なひと、品格ある人になる習慣を身につけさせようとする教育だと考えると、「人格教育」や「品性教育」より、品性の高さを表す意味合いをもつ「品格教育」と訳した方がよいのではなからうか。

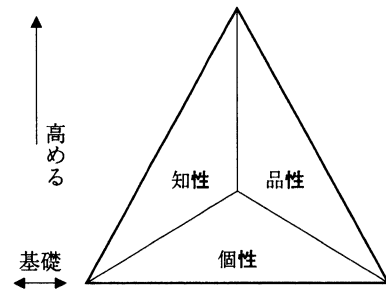


Fig.2 人格の三要素(案)

以上のことより、本稿ではこれ以降、キャラクターエデュケーションを人格の完成を目指す「品格教育」、Characterを「品性」と訳すことにする。

(4) 「よい」品性とは何か？

では、何がよいかを知っており、良さを志向し、良さを実践することがよい品性だとして、では「よい」とは一体どのようなことを指すのだろうか。

この「良さ」に関連する言葉には、Virtue (徳)、Value (価値)、View (ものの見方) という言葉がある。Ryan & Bohlin (1999) は、この3つを次のように区別する。

まず「ものの見方 (View)」。これは知的な見解であり、他者の意見や反対の事象に出会ったら簡単に変わるものである。

これに対して「価値 (Value)」は、「ものの見方 (View)」ほど簡単に変わらないが個人が欲

したり、望んだり、価値があると思ったりするものであり、人によって異なるものである。価値の中には倫理的な背景を持つものもあり、良い悪いという価値を含んでいるものもあるが、価値とは必ずしも行動に表す必要はない。価値を感じているものを選ばなくても良いし、価値を主張しなくても良い。価値は、単なる個人的な好みであり、道徳的な指標にも規範にもならないのである。

これに対して「徳 (Virtue)」は、個人の中で品性や知性を実際に磨いて高めた習慣であり、「道徳」ということばの「徳」の部分、または優れた品性を表すものである。徳とは、勤勉、誠実さ、個人的な信頼、勇気、忍耐力などの習慣であり、実際に私たちがよりよい人間関係を築き、よりよい仕事をし、より優れた人間になることを可能にするものである。私たちの持つ「徳」とは、単なるものの見方ではなく、価値でもない。徳が私たちがよりよい生徒、よりよい保護者、よりよい教師、よりよい配偶者、教師、友人、そしてよりよい市民にするのである。これらのことから、徳を教育すること、つまりいつも行動に出るようなよい心情や精神をいつも持てるように教育を行うことが、堅固な品性の発達の基礎になるといえる。このように「行動」という要因を入れると、価値と徳が区別できることになる。

ところでTable 1の品性徳目をよく見ていただきたい。著者が最初に見た品性徳目は、カンザス州ブルーバレー学区が採用しているボイヤー (1995) の品性徳目であった。私がこれを最初に見たとき、日本人の私が見ても全く違和感もなくこれらの徳目に共感できた。これらの徳目はまさに、私が自分の子ども達が身につけさせたいと思うものであり、また、自分自身も、それらの徳を身につけて品性を磨いてゆきたいと思うものばかりであった。逆に言えば、日本人の私が見ても当然だと思うこれらの徳目を身につければ、日本人でもアメリカでも通用することになる。つまり国際人になれるということでもある。ならば、ボイヤーの徳目を、もう少し日本人に馴染みのある訳語をつけて紹介し、子どもたちがこれらを身につけるように周囲の大人が意識して働きかけてゆけば、日本国内だけでなく、国際的に通用する人材を育成できることになるのではなからうか。そこで次に、ボイヤーの徳目について日本人の徳との

融合を試みる訳を考えることにした。

Ⅱ. 日本語版徳目作成の試み

(1) よい習慣の形成と徳目主義

ところで、過去を振り返ってみると、よい習慣を身につけるため、徳目を掲げて努力した人として、アメリカ民主主義の成立に貢献し、100ドル札の人物にも選ばれているベンジャミン・フランクリンがあげられる。フランクリンは、「純潔」「清潔」「質素」「謙遜」「勤勉」「正義」「節度」「規律」「決断力」「誠実さ」「節制」「平静」「中庸」という13の徳目を設定し、毎夜、これらの徳目が守れたかどうか反省したという。また、時には今週はこの徳目、来週はこの徳目、と順番に徳目をあげて、自分の品性を磨く練習をしたとされている (フランクリン, 2004)。カンザス州で見た学区で決めた8つの徳目を幼稚園年長組から高校まで繰り返す徳目主義は、このフランクリンのやり方の影響を受けているように思える。

しかし品性や品格、徳目を重視したのは、キリスト教の影響を受けたアメリカ人だけではない。小説家の曾野綾子氏 (2002) は、「品性」と書いて「ひと」というふりがなを振っている。曾野綾子さんは、生物としてのヒトではなく、品性を身につけたヒトが「ひと」と呼ぶにふさわしいと考えたに違いない。また、明治時代に活躍した福沢諭吉は、「独自尊の修身」を大切にした。このことばは「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して人たる品位を辱めざるもの、これを独立自尊の人」との解説がある。ここでも「品位」が重視されている。

新渡戸稲造 (1997/1898) は、日本人がいかに「心」を大切に民族であるかを英語で「武士道」に表して世界に紹介した。英語で書かれたこの本では、武士が大切にしてきた徳目が英語に訳されている。それは「義 (rectitude)」、「勇 (courage)」、「仁 (benevolence)」、「礼 (respect)」、「誠 (honesty)」、「名誉 (honor)」、「忠義 (loyalty)」である。ここにも日本人が品性や徳目を大切にしていたことが示されているように思える。

明治時代、福沢諭吉の「学問のすすめ」(1880)とともに、多くの人たちに読まれた本にスマイルズ (Smiles, 1858) の著書の翻訳「西国立志伝」がある。これは英語のタイトルは“Self-help, with

Illustrations of Character and Conduct”である。つまり品性 (Character) について書かれた本である。この本がベストセラーになったことは、日本人も品性を大切にしている気持ちを持っていることの表れであろう。加えてこの本を現代語版に直して「自助論」として出版した竹内は、自分を支えてきた信念として「勤勉」「誠実」「感謝」という3つの言葉を後書きで示している。

また戦後、経済界で活躍した松下 (1976) は、「素直な心」が大切であるとし、素直な心になるための10箇条 (「私心にとらわれない」、「耳を傾ける」、「寛容」、「実相が見える」、「道理を知る」、「すべてに学ぶ心」、「融通無碍」、「平常心」、「価値を知る」、「広い愛の心」) を掲げている。このように、明治時代から戦後まで、日本人も徳目を心の支えにしている人たちは多く存在するのである。

日本の小・中学校でも、そのほとんどで、教室の中央に、たとえば「勤勉」「友情」「元気」など、「知」「徳」「体」に対応する徳目が掲げられている。つまり品格、品性を大切にすることも、徳目を掲げることも、アメリカの十八番ではなく、古くから日本にもあるといえるだろう。このことから、アメリカの徳目を日本の価値にあうような徳目を訳せば、世界に通用する徳目を設定でき、21世紀を生きる子ども達に生きる指針を与えることができるかもしれないと考えられる。

(2) 日本語版品性徳目作成の試み

次にボイヤー (1995) の品性徳目を日本の学校にも通用するように訳してみることにする。その際、日本語と英語では徳目の概念が少しずつ異なる。そこで以下の点を工夫した。それは①Boyerの徳目を、一つの言葉で表現するのではなく、類似の複数の言葉で表現し、ふくみを持たせることにする、②「…すべき」という表現だけでなく、「…することなかれ」という禁止型も用いて表現することにする、③品性に関する徳目は、「行為」につながるものであることが重要なので、行為につながりやすい副詞やその他、行為に繋がることばを用いる、である。主な訳語をTable 2に示す。

Table 2 日本語版品性徳目案

Boyer (1995) の徳目	翻訳語と関連する概念	行為につながる言葉
尊敬 (respect)	礼節, 敬愛, 失礼なことをしない	きちんと
責任感 (responsibility)	責任感, 役割意識, 自覚	自覚を持って
忍耐強さ (perseverance)	根気強さ, 勤勉, 忍耐強さ	くじけずに
奉仕 (giving)	奉仕, 慈悲, 布施	自分から
自己統制 (self-control)	自律, 良い選択, 自己統制	ゆとりをもって
正直 (honesty)	誠意, 良心	正直に
共感 (compassion)	寛容, 親切	心を広く
勇気 (courage)*	勇気, 実践力, 反省する勇気, 素直な心	自分らしく

* ボイヤー (1995) の徳目には、この項目は含まれていない。しかし、Boyerの徳目を採用した学区が付け加えて採用していたので、ここでは追加して訳を試みた。

** ゴシックは、代表的なことばを示す。

Respect (尊敬) ;きちんと、礼節、敬愛、失礼なことをしない、など

Bhohin et al. (2001) には、「自分がして欲しいことを他者にする」ということが、西洋から東洋の思想、宗教に共通して見られることから、これを「黄金のルール」として紹介している。Respectはリコーナが教育の基本として、読み書きそろばんの3Rに加えて、もう2つのR (respect, responsibility) が必要だと考え、普及のためのセンターを作って活動しているほど大切にしているものである。これらのことから、この徳目は、数ある徳目の中でも最も重要なものの1つであると考えられる。

しかしこのrespectは大変訳しにくい。日本では「尊敬」というと、目上の人に対して使う意味合いが強いが、英語のrespectは同じ歳の人に対しても、年下の人に対しても、社会のルールや物、制度、自分自身に対しても用いることばだからである。このRespectを新渡戸稲造は「武士道」(Nitobe, 1898) の中で「礼」の訳として使っている。つまり「尊敬」というより、「礼」と関係深い言葉であるに違いない。では「礼」とは何だろうか。

「礼記」によると「礼節は仁の相貌なり」と記されている。これは礼儀と節度は仁という心の外面であると解釈できる。つまり、心の問題ではなく、外面、一種の形式のような物だと考えられる。また、「仁」とは「忠恕」で構成され、「忠」とは虚偽のない心、「恕」は、たとえば、川でおぼれている子どもを見たら、自分のことを考えずに助

けに飛び込むような、自分を無にして、相手の立場に立って考える心を意味する。そして、この「仁」表すのが「礼」なのである。「仁」は目に見えない。となると、仁は表すしかない。このように考えてみると、他者、物、自然に対して、大事に思っていることを表す礼儀と節度という形式が、結局、大切に思っている心を表すことに通ずるという意味ではなかろうか。このことから、行為につながる言葉は、大切に思っていることを「きちんと」伝える、と言う意味の「きちんと」とした。

英語のrespectも、どちらかという形式を重視しているようにも思える。となると、respectは心のあり方に関する尊敬という言葉よりも、心の中の思いを表に出す形式に重点を置く礼儀と節度、もしくは失礼なことをしない、と訳した方がしっくりくるのではなかろうか。こうすると、挨拶をする、お礼を述べる、失礼な態度を取らない、など、日本人が大切にしているマナーは、この部分に含まれることになる。

ただしどうしても訳しきれない部分は残る。それは、respectには、ものを大切にすること、自分自身を大切にすることも含まれることである。日本語で表現するとき、「きちんと」はものを大切にすることにも通じるが、自分を大切にすることが表しにくい。そこで自分自身を大切にすることに関する内容は、ここに含めることをあきらめ、Giving (奉仕), Courage (勇気) に含めることにした。Responsibility (責任感) ; 自覚を持って、役割意識、自分の責任を果たす、など

「責任」という言葉は著者には随分重い言葉の

ように思える。他者に「これはあなたの責任」と言われると、非難されているようで、思わず逃げたくなる衝動に駆られるような重さである。このような重い言葉に訳したら、人は責任を避けるようになってしまうかもしれない。それよりも進んで責任を果たしたくなるような、責任を果たすことが名誉であるような言葉に訳すことができないか、という点に注意を払い、訳語を選定した。

ところで、Fig. 1 に示したポスターは、裏に言葉の定義や指導法、参考図書が紹介されている。そしてこのことばの定義として、ポスターの裏には「当てにできる人であること」「信頼できる人であること」「義務を果たす人であること」「やる必要のある仕事で、自分も分担を引き受けること」「自分の失敗は、自分で責任を引き受けること」とある。この定義を見ると、アメリカでの「責任感のある人」とは、社会の一員としての自覚のある人、ということになりそうだ。つまり、闇雲に「責任を持つ」ということではなく、「社会に対して」「仕事に対して」と、責任を持つ対象まで含めた概念だと推察できる。このことから、「(〇〇への責任を) 自覚する」「(社会の一員としての、仕事上の) 役割意識を持つ」など、対象の存在を示唆する日本語の方がふさわしいと考えた。また、対象の存在を意識すると言うことは、社会的な役割であるという意味もあると考えられる。このことから、役割意識という訳語も採用した。行為につながる言葉は「自覚を持って」した。社会の役割りを自覚を持って取り組む。これなら逃げたくなくなるような重圧を感じることなく、進んで取り組む気になるのではなかろうか。

Compassion (共感) ; 心を広く(寛容、親切) など

ポスターの裏の定義によると、「相手を理解し、気遣ってあげること」「他者の世話をすること」「相手の気持ちも考えて親切にすること」「困っている人を見たら手助けすること」とある。

Compassionは辞書には「共感」と書かれている。しかし、語源から言うなら、「com」は「一緒に」という意味であり、「passion」は「パンを食べる仲間」という意味だという(カーネギー, 1999)。これに従うなら、日本で言うなら、「同じ釜の飯を食った仲間」の友情のようなものではなかろうか。だとすると、相手の個性や特性を十分にわきまえて、長所も短所も含めて相手を信じて

わかってやるような態度であり、これは相手と心が共振するような「共感」というより、相手をわかってやる懐の深さのようなもの、つまり、寛大さ、寛容さではなかろうか。日本の美德としても、共感より、寛容、寛大の方が好まれるように思える。このように考えるとcompassionは、日本人の徳としては、「寛容」と訳するのが良いように思われる。動詞につながる言葉としては「心を広く」とした。心が広いことが寛容の精神につながると考えたからである。

Honesty (正直) ; 誠実に、正直、良心、など

ポスターの裏の定義では、honestyは「本当のことを言うこと」「約束を守ること」「信用、信頼できる人であること」「言動一致; つまり、言うこととすることが一致していること」「正しいと思うことを実行に移すこと」となっている。信頼できる人であること、言うこととする事が一致していることは、日本人がいう、単なる「正直」を越えているように思える。新渡戸稲造は、「誠」をhonestyと訳している。とするなら、honestyは「誠実」、または誠実さの基盤となっている「良心」、または誠実の結果である「信頼」と訳するのが良いと考えた。動詞につながる言葉としては「正直に」とした。詰まるどころ、自分の良心に従って、正直に行動することが他者の信頼、自分自身への信頼につながると考えたからである。

Perseverance (忍耐) ; くじけずに、勤勉、根気強さ、忍耐強さ、など

ポスターの裏の定義では、「決して諦めないこと」「目標に到達できるように努力すること」「うまく行かなくても全力を尽くすこと」となっている。Perseveranceの辞書的な定義は「忍耐」である。しかし、「忍耐」という言葉は、外部から与えられた肉体的な苦痛に耐える忍耐、過酷な忍耐も含まれ、徳目として掲げるには、多くの別のマイナスの意味を与えてしまうことが危惧される。だとすると、「決して諦めない」「目標に到達できるように努力する」などの勤勉さ、根気強さなどの重要な意味の方を尊重し、「勤勉」「根気」と訳してみた。また、「忍耐」よりも「忍耐強さ」の方が、「忍耐」という言葉の持つマイナスの側面を減少させる言葉と考え、「根気強さ」とした。好意につながる言葉としては、根気強さに相当する「くじけずに」とした。

Self-discipline（自己統制）；ゆとりを持って、平常心、良い選択、自己統制、自律、など

Delf-disciplineの辞書的な意味は「自己統制」である。ポスターの裏の定義によると、「よい習慣を身につけること」「長期の目標を立て、それに近づくこと」「よい選択をしてゆくこと」となっている。Self-controllとself-diciplineのニュアンスの違いは、前者は内的な基準で自分をコントロールすることであり、後者は外的な基準に自分を合わせることだという。つまり、self-diciplineは良い行動をとれるように自分を統制することを意味している。これを日本語に訳すことは大変難しい。「よい選択をすること」を重視して、「よい選択」を含め、良い選択をする条件として、「自律」「平常心」「自己統制」があると考えた。また、自己統制の結果はゆとりとなり、ゆとりを持とうとすると自己統制が必要なことから、ここでは行為につながる言葉は「ゆとりを持って」とした。

Courage（勇気）；自分らしく、正しいと思ったことを行う勇気、反省する勇気、素直な心、など

勇気は新渡戸稲造の徳目にも見られる。新渡戸によると、勇気とは「正しいと思ったことを行う勇気」である。つまり実際に行動する力、実践力を意味する。Table 1のブルーバレー学区の徳目には、「反省する勇気」と書かれていた。しかし、日本では日常的で、反省を促す際には「勇気」とは言わないのではなかろうか。むしろ、親が子供に反省を促すときには、「素直になりなさい」と諭すのでは無かろうか。このように考えると、勇気には、「素直なところ」を含めて良いように思える。また、勇気に関して、行為に続くことばを「自分らしく」よいと考えた。正しいと思ったことを実行する、反省する、などは、詰まるどころ、自分らしく振る舞うと言うことではないかと考えたからである。また、「自分らしく」ということばは、英語のrespectに含まれる「自分自身を大切にすること」という意味を含めることができると考えた。つまり、英語のrespectは、日本語では、「礼節」+「勇気」で表現できることになるだろう。

Giving（奉仕）；自分から、奉仕、慈悲、布施

「奉仕」という概念は、日本にない概念のような気がしていた。しかし仏教聖典を調べてみると、「奉仕」という言葉ではなく、日本には「慈悲」

「お布施」という言葉があった。「慈悲」とは相手の苦を抜き取り、楽を与えることだという。だとすると、単なる「奉仕」よりも奥の深い言葉だと思う。また「布施」は寄付のことであり、キリスト教だけでなく、日本も昔から、神社仏閣には寄付をしてきた。さらに調べてみると、布施は単なる金銭的な寄付を意味するのではなく、お金のないものでも出来る7つの布施業というものがある。それは次の通りである。

- ① 身施；肉体による奉仕
- ② 心施；他人や他の存在に対する思いやりの心
- ③ 眼施；やさしいまなざし。そこにいるすべての人の心が和やかになる。
- ④ 和顔施；柔和な笑顔を絶やさぬこと
- ⑤ 言施；思いやりをもった、あたたかい言葉をかけること
- ⑥ 牀座施；自分の席を譲ること
- ⑦ 房舎施；我が家を一夜の宿を貸すこと

Givingを単に「奉仕」考えると、日本に余りなじみのない概念を導入するような気になる。しかし本質を考えてみると、決して日本になかったものではない。むしろ、日本人が培ってきた概念の方が奥深さを感じる。つまり、この品性を身につけようとするとき、日本人が昔から大切にしてきたものを守っていけばよいことになる。

また、ここでは行為につながることを「自分から」とした。奉仕や布施などは、つい、他の人が行動するのを待ってしまう。多くの人が「自分から」と、少しずつ互いに助け合ってゆく意識を持てば、親切で暖かみのある良い社会を作ってゆけるに違いない。respectや他の徳目に入りにくい「自分」に関するものは、この徳目にも含めることができるだろう。

以上、著者の訳を紹介してみた。しかしこれらの訳には、研究者だけでなく、教育関係者、他のいろいろな方たちと良い訳を工夫して、日本人が大切にしてきた品性をうまく組み込んでゆけたらと希望する。そして良いものができたとき、借り物でない長い歴史と文化に根ざした日本の品格教育の基礎ができ、世界に通用する品位ある日本人を育てることが出来るように思える。

Ⅲ. 今後の展開と落とし穴

では、西洋と日本の品性を統合したよい訳ができたとして、それで品格教育はうまくゆくのだろうか。

これに関して、資料2にはボストン大学が示した「人格教育の落とし穴」(Ryan & Bohlin, 1999)の全訳を示した。この最後の項目に、次のような文章がある。「人格教育は、生徒へ私たちがなす何かではありません。それは、価値を強いたり、価値を徐々にしみ込ませたり、品格を与えたりするものではありません。それは、よりよい人になりたいという、個人的な生涯プロジェクトを生徒が自分で作るよう助けるものなのです。

これに関連し、比叡山第253世、山田恵諦天台首座は次のように言っている。「宗教心がなければ人間なんて犬猫以下の存在なんです。犬猫は悪いことはしません。猫が台所のサンマを盗んだからって、本能に従っただけのこと。悪いことやっただけなんて思うてはおらん。…この悪いことを止める唯一の手段が宗教心を持つということです。宗教心というてもむずかしいことを考えんでよろしい。こんなことやったら子どものためにならんな。女房が泣いとるやろ。会社の仲間迷惑かけとるな。そう思うだけでよろしい。…人間だけが、悪の本能をもっとるかわり、その悪の本能を自力で断ち切り、善の方向へ向上する力をもっておる。…この「向上」と言うことが、人間を人間たらしめる所以なのです」。

ボストン大学の「人格教育の落とし穴」に書かれているものと、山田和尚の言っていることは近いのではなかろうか。要するに、悪い方向に向くのではなく、良い方向に向かおうという気持ちを育くむように支援してゆくこと、これが品格教育であり、良い人生を歩むのに必要なものではないか。

この時、特に注意しなくてはならないのは、「支援」することが重要なことであり、「教え込む」ことではない。これに関し、フロムは、正しいことには常に破壊性が含まれると述べている(Fromm, 1947)。つまり、正しいことは正しくないことを排除してしまいがちになる。その結果、正しくないものを破壊することに繋がると言うことであろう。このことから、子ども達が、自分から「よい方向に向かおう」という気持ちを育みた

いなら、徳や正しい考えを押しつけたり、それらで他者を裁くのではなく、周囲はヒントを与える程度にし、子ども達自身が自分の力でよい方向を見つかるようにしてゆくことが大切であろう。でなければ、品格教育は、その目的と逆の効果をあげることになる危険性を持っている。

チャレンジ(Challenge)という言葉は、とても難しいが、取り組む価値のある手応えの仕事ことを指すという。このように考えると、子ども達が自ら「よい人になろう」という気持ちを学校と保護者と地域とで連携し、子どもの中に育ててゆくことは、確かに難しいことではあるがチャレンジするに値する教育目標であるように思われる。

注

- i 本研究を作成するにあたり、科学研究費補助金(基盤研究(B)課題番号18330191、代表:青木多寿子)の補助を得ました。また、さまざまなアイデアを与えて下さった、岡山大学教育学部の橋ヶ谷佳正先生、宮崎宏志先生、兵庫県相生市立双葉小学校の立巳理恵先生に心からお礼申し上げます。
- ii 各種ポスターの裏には、この徳目についての定義、授業の仕方、授業例、子ども達への賞状例、関連図書が明示している。
- iii Bohlin, K. et al. (2001) は、子ども達に徳を内面化させるのに必要なことは、コミュニティの共通の定義や共通の言葉で「気づき(Awareness)」、「理解(Understanding)」し、誰も見ていなくてもよい「行動(Action)」が取れ、結果を「反省(reflection)」して少しずつ良い行動が取るようにすることであるとしている。つまり、「教える」とは書いていないことが重要であろう。

引用文献

- 青木多寿子 1999 「アメリカの小学校—The basic school 実践校のケースレポート」岡山大学教育学部附属教育実践総合センター研究年報、第2号、Pp.11-20.
- 青木多寿子 2001 アメリカの学校に見る児童・生徒によるボランティア活動—カンザス州ブルーバレー学区、シャウニーミッション学区でのケースレポート(単著)岡山大学教育学

- 部研究集録 第118号, 151-156.
- 青木多寿子 2002a アメリカの小学校における
道徳教育の現状(単著) 道徳と教育
No.310・311 Pp.58-78.
- 青木多寿子 2002b 「アメリカの小学校に見る
品性徳目教育とその運用」岡大学教育実践総
合センター紀要 第2巻, Pp.47-59, 2002.
- ボイヤー, E. 1997 「ベーシックスクール; アメ
リカ最新小学校改革提案」中島章夫監訳 玉
川大学出版部 (Boyer, E. 1995 “*The basic
school; a community for learning.*”)
- カーネギー, D. 1999 「人を動かす」山口 博訳
創元社 (Carnegie, D. “How to win friends and
influence people” 1936.)
- ディヴァイン, T. 他 2003 「「人格教育」のすす
め」上寺久雄監訳 コスモトゥーワン (“Cultivation
Heart and Character; Educating for life’s
essential goals”, 2001.)
- フランクリン, B. 2004 「フランクリン自伝」
渡辺利雄訳 中公クラシックス
- フロム, E. 1973 「人間における自由」 谷口隆
之助・早坂泰次郎/訳 東京創元社
(Fromm, Erich; 1947, “Man for himself.”)
- 加藤十八 1999 「アメリカの事例から学ぶ学力
再生の決めて」 学事出版
- 加藤十八 2004 「アメリカの事例に学ぶ学力低
下からの脱却—キャラクターエデュケーショ
ンが学力を再生した」学事出版
- 加藤十八 2006 「ゼロトレランス—規範意識を
どう育てるか」学事出版
- Lickona, T. 1993 The return of character
education, *Educational Leadership*, November,
6~11.
- リコーナ, T. 2001 「人格の教育—新しい徳の教
え方学び方」水野修次郎監訳 北樹
出版
- リコーナ, T. 2006 「人格教育のすべて」水野修次
郎, 望月文明訳 麗澤大学出版会 (“Character

- Matters: How to help our development good
judgment, integrity, and other essential
virtues.” 2004).
- 松下幸之助 1976 「素直な心になるために」
PHP研究所
- 新渡戸稲造 1997 「武士道」奈良本辰也訳 三
笠書房 (“Bushido. The Soul of Japan” The
Leeds and Biddle Company, 1898.)
- Ryan, K. & Bohlin, K. E. 1999 “Building Character in
Schools; practical ways to bring moral
instruction to life.” Jossey-Bass A Wiley Imprint.
- 曾野綾子 2002 「いい人をやめると楽になる」
祥伝社
- スマイルズ, S. 1988 「自助論」竹内均訳 三笠
書房 (Smiles, S. “Self-help, with illustrations of
Character and Conduct”, 1858)
- 山田恵緒 2003 「人生をゆっくりと—明るく,
楽しく, たくましく」PHP文庫
- 渡部昇一 2004 ヒルティに学ぶ自己修養術
「先知先哲に学ぶ人間学」致知出版社

参考資料

- ・ 仏教伝道教会 1973 「仏教聖典」
- ・ 福沢諭吉 福沢旧邸保存会パンフレット 大分
県中津市
- ・ Tomahawk Ridge Elementary School 1998 Basic
Schools All School Management plan.
- ・ “responsibility”, Creative Teaching Press.
- ・ “compassion” Creative Teaching Press.
- ・ “honesty”, Creative Teaching Press.
- ・ “self-discipline” Creative Teaching Press.
- ・ “Building Character & Community in the
classroom; GradesK-3”, Creative Teaching
Press (1997) .
- ・ “Building Character & Community in the
classroom; Grades 4-6”, Creative Teaching
Press (1997) .

【資料1】

人格教育マニフェスト (ボストン大学)

私たちの中に徳はないのだろうか。もし、徳がないとしたら、私たちは混乱した状況の中にいる
のだろうか。理論的な検証, 形式のない政府。それは私たちに安全を与えてくれるだろうか。人の
中に徳がないのに、どんな政府も自由と幸福を提案するとしたら、それは奇想天外な考えだろう。

ジェームズ・マディソン

道徳性とは無縁に人の精神性を教育するとしたら、それは社会にとって危険人物である。

セオドア・ルーズヴェルト

1996年1月、クリントン大統領は次のように繰り返し強調した。「私はすべての学校で、子ども達に品性を教え、
良い価値をもち、良い市民になることを教えることに挑戦する」。

アメリカの学校は当初は学校と教師に道徳的な権威を持たせて出発した。しかし、この20~30年の間にこの権
威は劇的に減少した。教師の多くが教室で良い人格を育もうと懸命に努力した。しかしほとんどの場合、他のメッ
セージと一緒にあったり、一貫性の欠いたメッセージとして受け取られた。価値の明確化、状況的な倫理学、モラ
ルジレンマの討論など、学校に価値と倫理を取り戻そうとする試みは短命で儂いものに終わり、子どもたちの人格
を育み、若い世代の行動を正すことに失敗したことを証明した。

私たちはアメリカの若者の間で暴力、青年の自殺、十代の妊娠の増加、他の病理学的、社会的に問題を持つ人が
増加して苦悩してきた。ここで私たちはもう一度、学校と教師は子どもの人格の教育者としての責任を持っている
と呼びかけたい。しかし学校だけがこの責任を持つとは考えていない。家庭、近隣家庭、信頼できる地域もこの課
題を一緒に分担してほしい。この国で本物の教育改革を行うとしたら、子どもの品性を高める品格教育に取り組み
こと私たちは提言する。本物の品格教育は、優れた学業達成、個人的な業績、真の市民教育の要である。すぐれた
品性を培う品格教育は私たちの生徒、学校、教職員、そして両親をもっと優れた状態に押し上げる教育である。
まだ不十分なものはあるが、次のガイドラインに示す原理が教育改革の中心となれば、教育改革の成果が上が
ると私たちは確信している。

1. 最も大きな意味で教育を考えたとき、道徳的な取り組み、つまり何が良くて、何が価値あることかを知ったり、
追い求めたりするように生徒達を導いてやる継続的、意識的努力を避けて通ることはできない。
2. 両親は子どもたちの最初の道徳の教育者である。したがって学校は家庭と連携すべきだと強く確信している。
学校でも、誠実、勇気、責任感、勤勉、奉仕、すべての人の尊厳に対する敬意のような、人としての徳、市民と
して徳を生徒たちが育くむよう、力を尽くす責任がある。
3. 品格教育とは徳を発達させることである。徳とは生徒が責任感ある、成熟した大人になるような良い習慣と良
い好みを発達させることである。徳というのは、人格の完成を目指す場合、最も重要な関心事である。品格教育
は、近年の関心事、たとえばエコロジー、学校での祈り、性別意識、制服、規則、イデオロギーが関わる問題な
どで、他者に受け入れられそうな正しいものの見方を獲得することではない。
4. 教師と校長はこの取り組みの中心である。教師や校長はこの使命を心に刻むと、発言や行動が洗練され、他者
への指導助言にも勇気づけが得られるだろう。学校の大人は全員、子どもたちの両親と地域から権威を与えられ
た道徳的権威の具体的なシンボルなのであり、子ども達と両親に影響を与える人であることは間違いない。
5. 品格教育は一つの方法があるわけではなく、決められた徳目や壁のスローガンなどに限られるものではない。品
格教育は学校生活を統合する包括的なものである。学校は責任感、熱心な取り組み、誠実さ、親切などの徳のコ
ミュニティとなり、それらのモデルとなり、それらを教え、期待し、それらを褒める継続的な練習の場となつて
ほしい。クラスから校庭まで、食堂から職員室、事務室まで、良い人格の形成が中心的な関心事とならなくては
ならない。

6. 人間は道徳的な知恵を長い歳月をかけて蓄積してきた。その知恵の多くは昔話、芸術、文学、歴史、伝記の中に含まれている。教師と生徒は、人類の道徳的な知恵を科学的なカリキュラムを越えて、このカリキュラム以外の蓄積も教育の資源として品格教育に応用してゆく必要がある。
7. 最後に、若者が、自分の人格を作り上げることは、人生で重要で必要な課題であると気づくことは大切なことである。学校での失敗や成功の経験、学問やそれ以外の運動的経験、知的な経験や社会的経験、これらの諸経験は、品格を身につけようとする個人的な努力への生きた多くの教材を提供していることに気づくことが大切である。

品格教育は単なる教育の流行、最先端の学校教育のやり方でもない。それは良い教育の基盤であり、個々人の知識と魂に普遍的敬意を示す取り組みである。私たちが関わる多くの子ども達が、温かい心や、精神性や、“良いことを知ること、良いことを愛すること、よい行動をとること”を身につけるのを助けながら、自分自身の品格をも作り上げようと再認識し、心がける必要があるだろう。

【資料2】

品格教育で避けなくてはならない落とし穴（ボストン大学）

1. 保護者を陰に押しやってははいけません。保護者は一番の同盟者です。同様に、コミュニティのリーダーたちでもあります（聖職者、市民グループ、PTA）。プログラムの中に、保護者との公のミーティングを入れてください。そしてどの人もそれを聞いたり、その意見を知ることができる機会を作ってください。
2. 教育長、教育委員会も陰に押しやってははいけません。実際、どの人格教育のプログラムも権威ある機関からの明確な委任や指示で行われるべきものです。
3. プログラムは一部の熱心な者、熱狂者のものであるべきではありません。成功するプログラムとは、学校の校長先生からバスの運転手まで、学校全体のコミュニティの関与が必要です。
4. ポスターやスローガン、他の品格教育の目覚ましい仕掛けのものだけに頼ってはいけません。よい人格教育とは、地味で、確固とし、忍耐強いよい習慣（徳）の発達が必要不可欠であり、人格の発達に関わったり、まねをしながら学習を積み重ねてゆくものなのです。
5. 徳を身につけさせるのに、外的な報酬を期待してはいけません。多様な行動には注意を向けることが必要ですが、いつも報酬を与える必要はありません。人格教育は、学業と教科外の活動の両方で、生徒が良くなろうと思う気持ちを喚起し、良くなろうとすることに時間を費やすことに興味をもつ気持ちを喚起し、生徒たちが内的なよい習慣を形成することを支援することなのです。
6. 「私がそう言ったように」、「私はそうしなかったように」という言い方は避けましょう。個々の行為は、簡単なことばで話すのではなく、断固として説明しましょう。最も時間を費やしていることを示す簡単な証明方法は、実際の行為で示すことです。この点が品格教育の取り組みの中で最も威力あるものとなる要素があります。「百聞は一見に如かず」ということを覚えておきましょう。もし、私たちの生徒に何らかの影響を与えようとするなら、品格教育は品格を高めることを教育の最前線にしなければなりません。
7. 心の教育のために教科の教育の時間を削ってはなりません。歴史的、伝統的な物語の中に含まれている偉大な逸話は芸術的、文化的、そして哲学的な価値を含んでいます。生徒たちとそれらを探し、まず内容を語り合うことを楽しみ、そして、その物語を偉大なものとしている要素について話し合しましょう。それから、生徒たちが道徳的な意味を見いだせるように手伝いましょう。そうすることで、その物語はより記憶に残るものとなるでしょう。
8. 品格教育から、「正しいものの見方を獲得する」部分を減らしてはいけません。また、品格教育について考えると言うことは、特に最も論戦となるテーマにおいて、モラルジレンマを討論することだという考えにだまされてはいけません。モラルジレンマを討論すること、価値の序列を討論しても、その価値観を形成することにはならないし、知的な高潔さを身につけることにもなりません。生徒は、ある道徳的な問題について触れるときには宗教的な意味を尊重し、まだ、学んでいないことについては謙遜の気持ちを忘れず、事実を集めて、知的な誠実さをもって、根拠に基づく討論をするように励ますことが大切です。
9. あなたがもし、数学や英語、国語、科学、芸術、フランス語の教師なら、あなたの学校の人格教育コースの授業は、あなたに関係のない、責任のないものだという考えにだまされてはいけません。学びや教育は、本質的に教訓的（moral）なものです。あなたの授業であなたがかける生徒への期待、励まし、そして生徒の知的な経験、人格的な経験に対する支援は、小さな研究会の中での猛勉強より、はるかに大きな影響力を持っているでしょう。
10. 廊下や食堂、運動場、職員室など、徳について褒めたり、模範を示したり、話をしたり、教えたりする、何万回の、そして、たった1回の機会を無視してはなりません。
11. 人格教育は、生徒へ私たちが何かをすることではありません。それは、価値を強いたり、価値を徐々にしみ込ませたり、品格を与えたりするものではありません。それは、よりよい人になりたいという、個人的な生涯プロジェクトを生徒が自分で作るよう助けるものなのです。